文部科学省指定

マイスター・ハイスクール事業

（次世代地域産業人材育成刷新事業）

最終成果報告書

（令和３年度～令和５年度指定）

岡山県立真庭高等学校

研究実施報告書目次

はじめに ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

ビジュアル資料 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

1　令和５年度実施計画 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

2　地域の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7

3　令和５年度実施概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8

4　マイスター・ハイスクールビジョン ・・・・・・・・・・・・・・・9

5　地域を担う人材育成カリキュラム ・・・・・・・・・・・・・・・・16

6　地域産業学習カリキュラム ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22

7　地域資源を活用した学習カリキュラム ・・・・・・・・・・・・・・30

8　学校設定教科・科目の研究 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31

9　真庭市郷育魅力化コーディネーターとの連携活動 ・・・・・・・・32

10　活動を支援する体制の構築 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32

11　取り組みの成果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・34

12　課題と今後の取り組み ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・34

はじめに

岡山県立真庭高等学校
校長　　豊田　涼

本校は、大正 13 年に創設された落合町他四箇村組合立落合実科高等女学校を源流に持つ落合高校と、昭和 21 年に創設された久世農林学院を源流に持つ久世高校とが、平成 23 年度に再編整備されてできた学校で、落合校地・久世校地を持つ２校地制で、農業・看護・普通科の３つの柱で教育活動を行ってきました。近年は、総合的な探究の時間「真庭トライ＆リポート」、「おかやま創生パワーアップ事業」等、様々な場面で地域の皆様の御協力をいただきながら、真庭地域をフィールドとする教育活動に力を注いできました。

令和２年度には「令和 10 年度を目途とする岡山県立高等学校教育体制整備実施計画」により２つの校地を落合校地へ統合することとなり、併せて、令和４年度には落合校地の普通科と久世校地の生物生産科・食品科学科の募集を停止し、落合校地に食農生産科・経営ビジネス科を新設しました。

時期を同じくして、令和３年度より文部科学省の「マイスター・ハイスクール事業」の指定を受け、『自然・社会・人との対話で育む真庭型産業人材育成構想－「環境（ＳＤＧｓ）」×「アグリビジネス」⇒豊かな生き方・働き方－』という事業名で取り組んできました。

本事業では、真庭市の農産物を生産・加工・販売する６次産業化への学習を農商連携により展開するとともに、地域の農林業資源を活用した農業体験や観光プランの提案等を行うアグリビジネスプランの作成に取り組むことや、地域関連企業と連携し、新商品の開発・提案を行うとともに、模擬会社スタイルの学習展開の中で起業家教育を推進することを主な目標としています。この目標を実現するために、真庭市を中心に、銘建工業株式会社をはじめとする多くの企業や団体の皆様の協力を得て、新しい学習プログラムの開発等を行ってきました。また、真庭市からマイスター・ハイスクールＣＥＯ、銘建工業株式会社から産業実務家教員の計２名をお迎えし、地域の様々な資源を活用するシステムの構築及び最先端の技術・知識等の指導を担っていただきました。今後も、これまで以上に地域や産業界との連携を密にし、幅広い知識と行動力を持った若者の育成に取り組み、真庭地域で農業・商業・看護の学びができる高校として進化してまいりたいと考えています。

結びになりますが、本事業に伴い、御支援・御協力をいただきました皆様に感謝申し上げます。また、関係諸機関の皆様に本報告書を御高覧いただき、今後の本校の教育活動の充実・発展のため貴重な御意見や御助言をいただければ幸甚に存じます。

＜ビジュアル資料＞

自然・社会・人との対話で育む真庭型産業人材育成構想
－「環境（SDGs）」×「アグリビジネス」⇒豊かな生き方・働き方－

■真庭高校マイスター・ハイスクールビジョンとその展開

事業目標

■ **自然と共生し、持続可能な地域と地域産業を担う人材の育成**

－真庭高校は、地域に受け継がれてきた自然や産業を生かして学ぶ中で他者とともに課題の発見や解決に取り組むことのできる力を育み、自らの生き方と地域や産業の未来を重ねて考えチャレンジする人材を育成します－

Ⅰ 農林業・商業のスキルを獲得することを目指し、地域産業と連携した学習を行います。

Ⅱ ビジネスプランの学習を通して、学科間連携を取り入れ、地域を学びのフィールドとした課題解決型の学習を行います。

Ⅲ 里山の豊かさを体感し、地域を愛する心の醸成を図るため、地域人材を活用した学習を行います。

Ⅳ 地球環境や循環社会の学習として、真庭市が進めるバイオマスを学び、より実践的な活動に結びつけます。

Ⅴ 地域の保・幼・こども園及び小・中学校や住民と連携した地域貢献活動の充実を図り、地域課題の発見と解決に寄与します。

育てたい人材像

■不透明で混沌とした社会を楽しく創造的に生きる意欲に満ちた人材
●地域と地域産業の持続と発展を担う人材
●６次産業化を推進する人材
●地域資源を活用し、新たな価値を生み出す人材
●地域に貢献する心や視点をもった人材

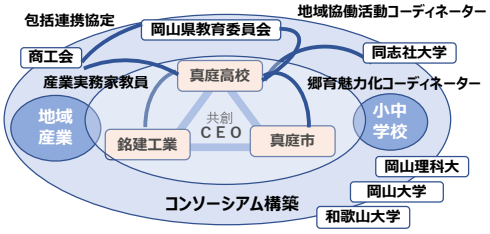
マイスター・ハイスクール運営委員会
■マイスター・ハイスクールビジョンの策定
■指標の策定
■事業の検証と改善

改善策提起 ⇧ ⇩ 意思決定

マイスター・ハイスクール推進委員会
■教育課程の検討・決定・実施
■校種間・地域産業との連携推進
※CEOを真庭市から派遣
※産業実務家教員を銘建工業から派遣

進捗・課題 ⇦
⇨ 改革・助言

人材育成の構想



■育てたい人材像

自然と共生し、持続可能な地域と地域産業を担う人材の育成

真庭高校は、地域に受け継がれてきた自然や産業を生かして学ぶ中で、他者とともに課題の発見や解決に取り組むことのできる力を育み、自らの生き方と産業の未来を重ねて考えチャレンジする人材を育成する。

育てたい人材像

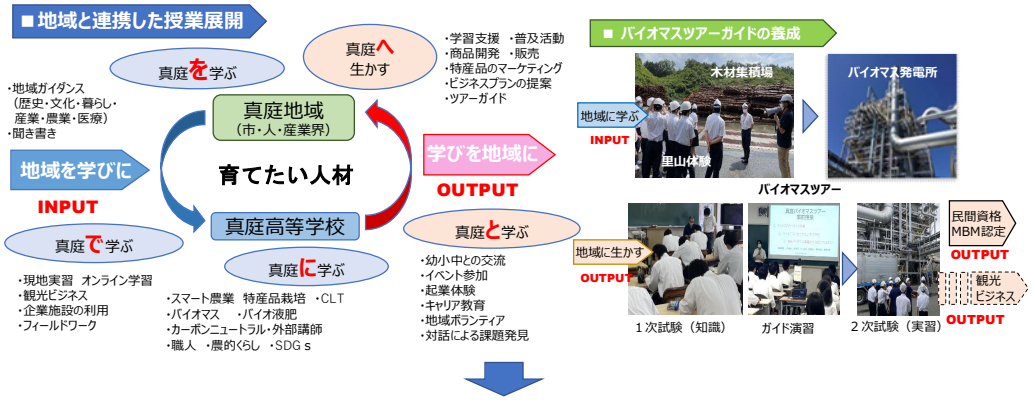
スキル・能力

●地域資源を活用し新たな価値を生み出す人材
●地域と地域産業の持続と発展を担う人材
●６次産業化を推進する人材

意欲・考え方

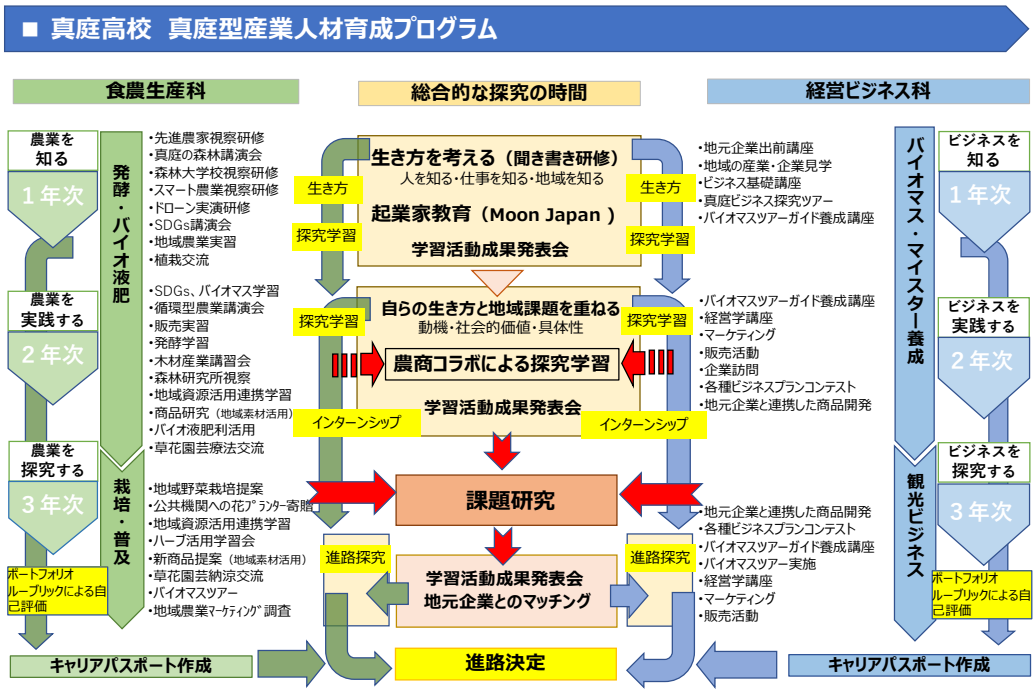
●不透明で混沌とした社会を楽しく創造的に生きる意欲に満ちた人材
●地域に貢献する心や視点をもった人材

地域産業界との連携体制を構築し、新学科における真庭型産業人材育成プログラムを策定する。



真庭高校　真庭型産業人材育成プログラムの策定

- ●専門科目だけの改革にしない　⇒　学校運営協議会のﾊﾞｯｸｱｯﾌﾟ・校内体制整備　→　全職員の共通理解
- ●地域との対話を起点とした授業実践　⇒　地域と語る会等の実施（郷育魅力化コーディネーターの活用）
- ●学科連携　⇒　総合的な探究の時間や課題研究での連携
- ●地域・産業界との情報共有　⇒　コミュニティアプリの制作（同志社大学との連携）



１　令和５年度実施計画

（１）管理機関

ア　管理機関（市区町村・都道府県）

ふりがな	まにわし
管理機関名	真庭市
代表者職名	市長
代表者氏名	太　田　　昇

イ　管理機関（産業界）

ふりがな	めいけんこうぎょうかぶしきがいしゃ
管理機関名	銘建工業株式会社
代表者職名	代表取締役社長
代表者氏名	中　島　浩一郎

ウ　管理機関（学校設置者）

ふりがな	おかやまけんきょういくいいんかい
管理機関名	岡山県教育委員会
代表者職名	教育長
代表者氏名	鍵　本　芳　明

（２）事業名

自然・社会・人との対話で育む真庭型産業人材育成構想

－「環境(SDGs)」×「アグリビジネス」⇒豊かな生き方・働き方－

（３）事業概要

・中山間地域において自然と共生しながら持続可能な地域産業と地域を担う人を育むため、産業と教育に知見を有する真庭市職員をマイスター・ハイスクールＣＥＯ、銘建工業社員を産業実務家教員として真庭高校に配置するとともに、小中連携等に取り組む郷育魅力化コーディネーターの配置やコンソーシアムの構築により地域で高校教育を共創する。

・真庭高校において、真庭市の農産物を生産・加工・販売する６次産業化への学習を農商連携により展開するとともに、地域の農林業資源を活用した農業体験や観光プランの提案等を行うアグリビジネスプランの作成に取り組む。地域関連企業と連携し、新商品の開発・提案を行うとともに、模擬会社スタイルの学習展開の中で起業家教育を推進する。

（４）令和５年度実施計画

① マイスター・ハイスクールビジョン【マイスター・ハイスクール運営委員会】

・マイスター・ハイスクールビジョンの進捗状況を管理するとともに、評価検証を行い、令和６年度からの自走に向けた体制構築についての議論及びビジョンの改善を行う。

② 地域を担う人材育成カリキュラム【マイスター・ハイスクール事業推進委員会】

・マイスター・ハイスクールビジョンに基づき、自らの生き方と持続可能な地域産業を重ねて考え、地域の担い手を育成するために必要な教育課程編成への提案や助言、また実効性を高めていくための連携提案等を行う。

・真庭高校での学びを小中学生に伝える交流学習の在り方を検討する。

・真庭高校と地域企業との連携について協議し、地域をフィールドとした学習展開の在り方を検討し、試行する。

③地域産業学習カリキュラム【ＣＥＯ・産業実務家教員・真庭高校】

・令和４年度以降、環境と産業についての学びと地域産業及び地域での実習の場を、ＣＥＯを中心に検討し、産業実務家教員が課題研究等で真庭市の産業等を指導するとともに、実習先で体験的な指導を行っている。引き続き地域産業学習を進路指導に結び付けていくとともに、地域の担い手を育成するキャリア教育計画を決定・実施する。

④地域資源を活用した学習カリキュラム【ＣＥＯ・真庭高校】

・令和４年度以降に食農生産科及び経営ビジネス科の全部又は一部の生徒に対して実施する、地域企業等と連携した取組内容を検討・実施するとともに、さらなる連携先や連携方法の検討を行う。

・令和３年度に計画した全学科で実施する総合的な探究の時間「真庭トライ＆リポート」で、テーマ『SDGs 未来杜市真庭～地域を学び、地域に学ぶ』を実施する。地域に出向き外部機関と積極的に協働して探究活動を深める。

⑤学校設定教科・科目の研究【マイスター・ハイスクール事業推進委員会】

・令和３年度に作成した真庭型産業人材育成プログラムをもとに、学科横断型学校設定教科・科目の内容と効果について検討し試行を行う。

⑥真庭市郷育魅力化コーディネーターとの連携活動【ＣＥＯ・郷育魅力化コーディネーター・真庭高校】

・真庭市郷育魅力化コーディネーター・真庭高校による保・幼・こども園及び小・中学校との連携活動を実施する。

・真庭市郷育魅力化コーディネーターを中心として、教科・科目や総合的な探究の時間において、聞き書きの手法を取り入れた活動を実施する。

⑦活動を支援する体制の構築【管理機関】

・本事業に参画する個人・団体を広げるなど持続可能な推進体制構築を目指す。

（５）令和５年度事業実施体制

意思決定機関の体制（マイスター・ハイスクール運営委員会）

氏　　名	所　　属　・　職
豊　田　　涼	岡山県立真庭高等学校・校長
中　島　浩一郎	銘建工業株式会社・代表取締役社長
太　田　　昇	真庭市・市長
鍵　本　芳　明	岡山県教育委員会・教育長
大　月　隆　行	真庭商工会・会長
渡　辺　伸一郎	晴れの国岡山農協・真庭統括本部長
澁　澤　壽　一	NPO 法人共存の森ネットワーク・理事長
池　永　京　子	Maman 代表
中　村　妃佐子	株式会社 HAPPY FARM plus R・取締役

事業推進機関の体制（マイスター・ハイスクール事業推進委員会）

氏　　名	所　　属　・　職
平　田　　勉	マイスター・ハイスクール CEO
豊　田　　涼	岡山県立真庭高等学校・校長
中　島　　洋	銘建工業株式会社・総務人事部長
道　満　洋　和	（一社）真庭青年会議所・前理事長
三　村　伸　行	NPO 法人真庭あぐりガーデンプロジェクト・ゼネラルマネージャー
二　若　玉　基	真庭市産業観光部・産業政策課長
武　村　良　江	真庭市教育委員会・教育次長
室　　貴由輝	岡山県教育庁・高校教育課高校魅力化推進室長
宮　阪　淳　司	岡山県立真庭高等学校久世校地・副校長
杉　山　俊　幸	岡山県立真庭高等学校落合校地・副校長
大　越　健太郎	銘建工業株式会社・小断面工場長（産業実務家教員）
吉　野　奈保子	真庭市郷育魅力化コーディネーター
大　岩　　功	真庭市郷育魅力化コーディネーター
丸　山　敬　三	真庭支部中学校長会・会長

（６）課題項目別実施期間

業務項目	実施日程（契約日～令和６年３月３１日）											
	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10 月	11 月	12 月	１月	２月	３月
①マイスター・ハイスクールビジョン	○印　運営委員会				○				8 月・11 月進捗状況確認	○	評価・検証	○
②地域を担う人材育成カリキュラム	◆印　事業推進委員会			交流学習、地域・産業界連携協議	◆				◆		◆	
③地域産業学習カリキュラム	銘建工業バイオマス学習・バイオマスマイスター養成講座・資格試験					★				検証・次年度計画		
④地域資源を活用した学習カリキュラム	真庭 TR 実施			連携授業等実施		全国産業教育ﾌｪｱ発表	★			検証・次年度計画	★ 真庭 TR 発表会	
⑤学校設定教科・科目の研究	（◆事業推進委員会開催時に検討）				◆				◆		◆	
⑥真庭市郷育魅力化コーディネーターとの連携	聞き書き講座、総合的な探究の時間の支援 市内探究ツアーのコーディネート、教育課程構築の検討、次年度交流学習計画											
⑦活動を支援する体制の構築				協力企業アンケート					大学との連携（ｺﾐｭﾆﾃｨ・ｱﾌﾟﾘ）			

２　地域の概要

（１）真庭市の概要

真庭高校の位置する真庭市は、豊かな自然に囲まれ、農林業、ジャージー牛などの畜産が盛んな地域であり、出雲街道の要所として古くから祭・温泉の観光や伝統工芸、酒や酢・味噌などの伝統産業の栄えた地域である。近年ではバイオマス、SDGs の先進地として、バイオマス発電やバイオ液肥を活用した農業促進、地域資源を観光に生かす観光地域づくりなど、市民とともに SDGs 達成を目指す活動を展開している。

（２）銘建工業株式会社の概要

銘建工業株式会社は、全国トップクラスの集成材事業を中核に、創業以来の国産材製材事業を含めて、主に住宅用木質構造材の供給を行っている。さらに製材工程で発生する木屑等を利用した木質バイオマス事業では、電力の販売や木質ペレットの製造販売を行っている。

３　令和５年度実施概要

令和５年度は、本事業で指定された「農：食農生産科」と「商：経営ビジネス科」が設置されて２年目であり、専門教科の教員数もまだ十分とは言えない状況であったが、ＣＥＯ・産業実務家教員と専門教科教員を中心に、１年目から試行錯誤しながら取り組んだ学習展開と地域連携の取組を継続しつつ、マイスター・ハイスクールビジョンに沿い、新しい取組を交えて順次着手した。既存の学科においては、これまで培ってきた地域連携・地域貢献活動を継続して実施した。

（１）管理機関による人的支援

事業名にもある「自然・社会・人との対話で育む真庭型産業人材」を育成するため、木質バイオマス産業で先端を行く地元企業銘建工業株式会社が管理機関として参画した。あわせて同社管理職社員を産業実務家教員として令和４年度から派遣した。

またもう一つの管理機関である岡山県教育委員会は、県下初となる産業実務家教員への特別免許状の発行や本事業を遂行するための助言を行うなど側面支援を行った。

代表管理機関を務める真庭市は、本事業を通じた新たなカリキュラム編成を主導するマイスター・ハイスクールＣＥＯを１名任用し高校に配置するとともに、地域と高校をつなぐ郷育魅力化コーディネーターを任用し、探究的な学習の時間のサポートや「聞き書き」の導入促進を行った。またあわせて今後の自走化を見据え、庁内プロジェクトチームによるアクションプランの策定及び実施により高校連携を全庁的取り組みに引き上げ、産業及び地域振興を中心に各担当課が直接関わる関係性を構築した。

（２）管理機関による財政支援

管理機関の代表である真庭市にとって、真庭高校は旧落合高校、旧久世高校の時代を含め地域産業の担い手として多くの産業人材を輩出してきたことから、同校の存続を持続可能な地域づくりを進める上で重要な課題と位置付け、市を挙げて財政支援することとしてきた。本事業は令和５年度で終了するが、本事業期間中に構築したカリキュラムがスタートする令和６年度以降においても、それまで培ったノウハウを生かし続けるため、高校と連携して継続した財政支援を行っていくこととしている。令和５年度は、地域から校内へ人材を招いたり、学校から地域へ学びに出て行く移動経費を確保したりするなど、地域連携に係るコストを負担する財政的支援を行った。

（３）地域で支える体制づくり

自走化に向け、本事業に参画する個人・団体を広げ、コンソーシアムを構築することを目標として、その前段として地域づくり団体の構成員でもある若手事業者らを交えた小規模な「合同会議」を令和４年度は月１回ペースで開催し、地域で支える体制を作っていくための検討を重ねてきたが、令和５年度は新しい教育課程の構築に注力したため合同会議を公務関係者のみで実施した。当面は、令和６年度から学校に設置される学校運営協議会での関わりとともに、地域との緩やかなつながり（又は地域学校協働活動的な動き）に対する支援を引き続き行っていきたいと考えている。このような形を通じて学校運営方針を注視しつつ、将来的には意思ある団体・個人等の組織化を図ることを視野に入れていきたい。

「行きたい高校」「学びたい環境」としていくことは、地元進学率の向上はもとより地域が支える意義にもつながってくることから、高校内部での取組と合わせ、令和５年度は、地元ケーブルテレビの番組への生徒出演、市広報紙（広報まにわ）での特集、市ホームページ（VIVA まにわ）での紹介、市内小中学校・保護者が使用するアプリ（コドモン）への学校広報紙配信などの取組を行った。

４　マイスター・ハイスクールビジョン

（１）マイスター・ハイスクール運営委員会

運営委員会は別記１の委員により構成し、主に次の役割を担った。

① マイスター・ハイスクールビジョンの策定

② マイスター・ハイスクールＣＥＯの選任

③ 産業実務家教員の選任

④ マイスター・ハイスクールビジョンの進捗管理及び指導助言等

運営委員会は、事業期間中に８度の会議を開催した（令和３年度に２回（うち１回は書面開催）、令和４年度に３回、令和５年度に３回）。令和５年度の実施概要は別記２のとおりである。

（別記１）運営委員会名簿（当初委員の 50 音順）

氏　　名	所　　属　・　職
池　永　京　子	Maman 代表
太　田　　昇	真庭市・市長（委員長）
大　月　隆　行	真庭商工会・会長
岡　田　茂　樹 渡　辺　伸一郎（R5.4.1～）	晴れの国岡山農協・真庭統括本部常務理事 晴れの国岡山農協・真庭統括本部長
鍵　本　芳　明	岡山県教育委員会・教育長
澁　澤　壽　一	NPO 法人共存の森ネットワーク・理事長
豊　田　　涼	岡山県立真庭高等学校・校長
中　島　浩一郎	銘建工業株式会社・代表取締役社長
中　村　妃佐子	株式会社 HAPPY FARM plus R・取締役

（別記２）運営委員会の実施概要

ア　第１回マイスター・ハイスクール運営委員会

（ア）日時：令和５年８月４日（金）18:30～20:50

（イ）会場：真庭市役所本庁舎　３階会議室

（ウ）議事:マイスター・ハイスクール事業進捗について

a）今年度の進捗状況等

b）課題への対応（案）等

（エ）議事概要（意見抜粋）

〇高校生たちにとってどういう教育が一番ありがたいのかを考えると、一番は「人から」である。「キャリアパスポート」を作る目的は自分の生き方を見つけることであり、そのためには人と会わせることが大切であり、さらにそのためには地域で子どもを育てるという意識になること。例えば羊羹づくりを見て「あれは格好よい」と思えるかどうかだ。そういう部分こそ一番の魅力となり得る。「地域丸ごと真庭高校」にできるかどうかが鍵だ。

〇今は大変な時期であることは間違いない。ただマイスター・ハイスクール事業の理念にもあるように、これほど激しく変化する社会に対応できる人材を学校の中だけで育てることは無理がある。「地元産業界と連携して作っていくのがこの事業である」と途中で感じるようになった。これだけ資源がある真庭であり、新しいやり方を企業や地域と作ることが大切。

〇根本的なところで、生徒たちにこれからの可能性が感じられるような学びを提供したい。これを産業界にも農業界にも示してもらいたい。企業の努力を高校生に見せることも大切。

〇生徒自身が進みたいと思えるものでなければいけない。「環境だけ整えるので後はどうぞ」ではなく、企業とタイアップできることを見つけていくことが大切。ビジョンが明確になっている高校が選ばれやすいと思う。

〇０→１（ゼロイチ：新規事業などゼロから何かを生み出すことを指す造語）を生徒と語らせて欲しいというのが地域の願い。

〇企業連携について「簡単ではない」と言うのが現実だが、企業側も汗をかく姿を見せることの大切さを意識してほしい。学校現場に入れるような仕組みを考えてほしい。

〇先生方の熱意などももっと知る必要がある。教員とお互いを知り合う場面も必要ではないか。

〇産業界との協力関係について事務的な話で終わらせず政策論的に進めていく。

〇真庭の挑戦を生徒に見せたい。

イ　第２回マイスター・ハイスクール運営委員会

（ア）日時：令和６年１月 16 日（火）18:00～20:00

（イ）会場：真庭市役所本庁舎　３階会議室

（ウ）議事等

a　学科改編から、３学年完成に向けた取組の現状（報告）

b　現状を踏まえ、課題解決に向けた方策

c　真庭高校への志願者確保の方策

（エ）議事概要（意見抜粋）

〇この事業を見ていて、方向性は一致しているはずなのにもったいないという感覚。もう少し単純な言葉に集約していけると、中学校や地域に対する強みになるのではないか。

〇育てたい人材像としては、貢献意識よりも、自ら選択肢を集め、選択し、実行できる人材と考える。そういう人材でなければこれからの社会では活躍していけないと感じつつ、そういった人づくりに支援していきたい。真庭高校の「らしさ」をきちんとつくって、そこにつながる体制や取り組みを作っていけたらと思う。

〇「キャリアパスポート」は最後のところだけを見るのではなく、生徒が高校時代から将来へ向けての選択肢を増やすことが目的だ。これには情報やファシリテートが肝要であり、できれば中学から継続してサポートしていくことが望ましい。

→現状、中学生からそういう体系になっている。

〇真庭高校が普通科高校から専門高校に変わっていく中でどういう柱を立てていくかを考えていくための会議であったはずで、２年間携わっているが、未だに柱が定まっていないと感じる。

〇どこまで生徒の声を聞いているのか。「生徒の声を聞く」と「やりたいこと」、「講師（教員）」、「進路先」が大きな要素と感じる。

〇アルバイトはぜひやってもらいたい。収入もだが、自ら稼ぐことをデザインすることが大切。

→校内ルールの見直しの検討に入っている。

〇子どもたちの声という発言について。子どもたちのニーズももちろん大切だが「何を学んで、何に繋がっているのか」を生徒自身が語れるようになっているかという視点も大切。ニーズを聞くと当然たくさんの意見が出てくる。それに流されるのではなく、育てたい人材像に対して、私たち自身がその姿勢で生きているのか、活動しているのか、発言しているのか、が求められていると感じている。学科連携の話もあったが、世の中は全て繋がっているという話を、押し付けていくというと語弊があるが、背中を見せないと伝わらないと感じている。

〇第３回では決定事項をオープンにする会議を開催する。

ウ　第３回マイスター・ハイスクール運営委員会

（ア）日時：令和６年３月 19 日（火）17:00～18:30

（イ）会場：真庭市役所本庁舎　３階会議室

（ウ）議事等

a　３年間のまとめ

b　第２回運営委員会で提示された課題への対応

〇マイスター・ハイスクールに、全校を挙げて取り組むことの表明

①真庭高校の学校運営基本方針にマイスター・ハイスクールの考え方が取り入れられること。

②学校運営基本方針を着実に実行するための校内推進体制

③真庭型産業人材育成プログラムの学校正式方針化

（エ）議事概要（意見抜粋）

〇来年度以降の運営方針については、マイスター・ハイスクールの考え方を踏まえ、スクール・ミッションをもとに学校経営の方針を定め、学校全体におろしていく。このスクール・ミッションに本事業で進めてきた企業等との連携や、育てたい人材像が含まれており、これを基に学校運営を進める。

〇学校運営協議会の委員についてはすでに候補者と調整中であり、広く地域の声を拾い、学校運営に反映させていきたい。

〇カリキュラムについては、株式会社 Moon Japan の事業と聞き書きのグループ編成など調整中のものもあるが、速やかに検討し、２年生で探究からインターンにつないで発表。３年生は進路学習を中心に１・２年生で培ってきたものを課題研究で探究し、発表していく流れ。

〇校内推進体制については、定期的に企画会議を開き、浸透させていく。

〇地域連携については主幹教諭か指導教諭を充てる地域連携担当教員を設置し、ＴＲ担当者、学年団担当者、地域連携担当者、郷育魅力化コーディネーターで地域連携学習推進チームを構成。また真庭市との合同会議も継続させていく。

〇大学との連携により開発中のコミュニティ・アプリを使い、地域や商工会とも連携していく。

〇１年生で聞き書きなどにより社会課題を見つけるところから、２年生で生徒自身がテーマを設定できたらよいのではないか。そして３年生に進学対策という言葉が多過ぎるのではないか。もう少し進路を探究する時間があってもよいと感じる。また、地域連携体制ができるのはよいが、企画会議に通さないと動けないのか少し懸念がある。

→推進体制について、最終的な機関としては職員会議になるが、毎週１回の企画会議を通すことで動くことはでき、比較的動きやすい形である。またチームでの協議に加え学科ごとの動きもある。

〇地元の基礎自治体との連携に苦慮する学校が多い中、当初から市長以下基礎自治体のコミットがあったことは特筆。環境・地域資源が整っている面では群を抜いていた。一方で、基礎自治体と学校の関係性の面では「一枚岩」に至れていなかったことは否定できない。

〇今までと異なる、真庭で生きる、違う生き方を見つけるという生徒を育成していく場としてスタートラインに立ち、一歩を踏み出せた。今後は先生方と保護者の変化、「外へ行けなかったから残る」ではなく「ここで生きたいから残る」に変えていかなければならない。

〇発表で「真庭に、真庭で、真庭を…」と連呼されていた。真庭で生まれた以上は真庭のことを好きになってもらいたいのは小・中も同じだが、特に自分の意思で決める第１段階である 15 歳のときに、「真庭で」「真庭に」…が叶う学校になったらよいと感じた。

〇「卒業生が出ていないから…」という意見に対しては、「今」を伝える責任があると言いたい。「どう育てたいか」は今でも伝えられる。素晴らしい資源があったが、学校が一つになって知恵を出し合え

たか、全体で達成感があったかというと残念な思いもある。

〇現実的な状況下で、「真庭に行けばこれができる」と思ってもらえるようにしたい。大人の価値観を変えることも含め、真庭高校だけの話題にせず、取り組んでいきたい。

（２）マイスター・ハイスクールビジョンの進捗・評価

マイスター・ハイスクールビジョンは次の５項目を設定し、地域と協働しての魅力ある学習を展開することを目標に取り組んだ。

Ⅰ　農林業・商業のスキルを獲得することを目指し、地域産業と連携した学習を行います。

●地域の特産品の栽培技術を学び、その普及のための地域の先端農家と連携
●特産品のマーケティング学習
●産業界と連携したキャリア教育
●スマート農業の知識・技術を学び、専門スキルを習得

Ⅱ　ビジネスプランの学習を通して、学科間連携を取り入れ、地域を学びのフィールドとした課題解決型の学習を行います。

●地域の特産品を使った商品開発とビジネスプランの提案
●地域の産業や環境を生かした観光ビジネスの学習
●ビジネスプランを基にしたビジネスコンテストへの挑戦
●地域産業との協働による起業体験

Ⅲ　里山の豊かさを体感し、地域を愛する心の醸成を図るため、地域人材を活用した学習を行います。

●地域人材から学ぶ「聞き書き」
●地域をフィールドとした研修（実地・オンライン）
●地域・産業界などの人材を外部講師として活用
●地域活動、地域ボランティアなどへ参加・企画・運営

Ⅳ　地球環境や循環社会の学習として、真庭市が進めるバイオマスを学び、より実践的な活動に結びつけます。

●銘建工業等での実習を踏まえた林業バイオマス学習
●バイオ液肥の利用方法の研究・利用実践と普及活動
●カーボンニュートラル、環境負荷低減の取組と経営の学習
●SDGs を題材とした探究学習

Ⅴ　地域の保・幼・こども園及び小・中学校や住民と連携した地域貢献活動の充実を図り、地域課題の発見と解決に寄与します。

●校種を超えた交流学習や体験学習の支援
●地域への農業技術普及や販売学習
●地域住民との対話による課題発見と課題解決の協働
●提案による社会教育の場づくりや市が行う取組への積極的な参加

それぞれの項目についての進捗・評価については、次のとおりである。

Ⅰ　農林業・商業のスキル獲得・地域産業との連携学習

先進技術の学習については、食農生産科１年で、自動草刈り機やＧＰＳ搭載のトラクターなどが活躍する先進農家を訪問した。生徒は、作業の効率化だけでなく、農業が地域の景色を作っていることも知ることができた。農業用ドローンの実演見学や操作演習にも意欲をもって取り組み、農業大学校の講義ではスマート農業のメリットだけでなく、デメリットについても学んだ。

ＣＬＴ（直交集成板）は真庭市内で製造・加工する企業があり、真庭市を支える産業の一つである。その企業から派遣された産業実務家教員の授業では、木造でも高層建築を可能にするＣＬＴのすばらしさについて学ぶとともに、食農生産科の課題研究でＣＬＴを用いてベンチを制作し、市の協力の下にバス停等に設置した。多くの方に利用され、生徒たちはやりがいを感じることができた。

また、Ⅲのとおり地域人材の活用を通じて、地域産業と連携した教育・学習を行うことができた。

Ⅱ　ビジネスプランの学習・地域を学びのフィールドとした課題解決型学習

令和５年度は経営ビジネス科２年で地域資源を生かした商品開発に取り組んだ。生徒はいきおい独りよがりな発想になりがちであるが、市産業政策課職員によるリサーチ講座等を通じて、生徒たちは自らの考えを補正しながらアイディアを多角的に検討し、ブラッシュアップさせながら、地元企業の方からもアドバイスをもらい、商品化を目指し、試作を重ね、令和６年２月には試作品の完成に至った。すでに梨を使ったスムージーが商品化されている。

ビジネスプラン学習については、経営ビジネス科２年生全員が岡山イノベーションコンテストに挑戦し、そのうち２チームが２次審査に進出した。

起業体験については、経営ビジネス科のみならず食農生産科からも参加可能とし、新しいタイプのインターンシップである Cultivate the future maniwa に課外活動として参加した。これは都市部企業と真庭市内の企業をマッチングさせ、０→１のアイディア創出から新規事業を立ち上げるまでを高校生が伴走し、プレゼン発表までを行った。生徒たちが新たな価値を見出だす視点を持つことができ、起業のハードルが下がることを期待している。

観光ビジネスについては、Ⅳのとおりバイオマスツアーガイド養成を実施したが、今後大学との連携等によりまだまだ可能性の広がる分野と捉えており、引き続き取り組んでいきたい。

ビジネスプラン学習については、５項目のうちでⅣの次に特色化できた取組と考えているが、学科間連携の余地のある中で比較的経営ビジネス科寄りの取組となっており、引き続き学科間連携の充実に向けて取り組んでいきたい。

Ⅲ　地域人材活用学習

外部講師の活用や地域をフィールドとした学習については、令和４年度から経営ビジネス科１年が「ビジネス探究ツアー」と呼ぶ学習を行った。郷育魅力化コーディネーターや地域協働活動推進員との協力でコースを編成し、単に施設を巡ることが目的ではなく、人に会い、生き方を考えることを目的として実施した。

地域の方々の地域を想う話が生徒たちの心を動かしたようで、生徒のツアー後の感想には自分たちも地域のために力を尽くしたいという思いにあふれ、手応えが感じられた。ところが、次年度の１年生の感想には上滑り感があるなど、これらの学習において、指導する先生の意識や振り返りの重要性を感じるところである。

また「地元企業出前講座」と呼ぶ学習では、７異業種８社から外部講師を招き、話を聞き、生徒は仕

事の違いを知るだけでなく、異なる課題に向き合い、様々に工夫していることを学ぶことができた。ただし、講義形式の授業ではモチベーションが維持できない生徒も多く、授業を対話型にするなどの工夫が必要と感じられた。

人に会い、話を聞き、文章にしたためることで自らの生き方、働き方を考えるに当たり有効とされる「聞き書き」の取組については、令和５年度においては総合的な探究の時間を活用して行うメニューの一つに位置づけられていたが、十分な取組に至っておらず、引き続き検討していきたい。

Ⅳ　循環型学習・林業バイオマス学習

真庭市の進める循環型社会や林業バイオマスの学習については、地域を自分の言葉で語れる生徒にしたいという狙いも持ち、令和５年度経営ビジネス科で、産業実務家教員の協力を得てバイオマスツアーガイドの養成を授業化した。ガイド養成というと一見知識を詰め込む学習と思われるが、そうではなく、観光局のスタッフからお客様をガイドする上での失敗談や難しさ、喜び、やりがいを語ってもらい、お客様への目配り気配りも含め、ガイドの原稿も自分で作り、学習した。最初は消極的だった生徒も、ガイドをやり終えると、達成感を感じ、自信を持つに至った。結果、初年度は７名が観光局からガイド資格である真庭バイオマスマイスター（通称ＭＢＭ）の認定を受けた。

今後、経営ビジネス科では、バイオマスツアーをガイド養成や観光プランづくりの学習（３年生）につなげていきたい。ＭＢＭの認定を受けた上級生が下級生に向けてアウトプットすることで学びが循環できるような工夫や、地元敬老会や子供会のガイド等、実践の場を広げていきたいと考えている。

このバイオマス学習を通じたバイオマスマイスター養成は、５項目のうちで特に特色化できたと考えている。

現在は経営ビジネス科のみの取組となっているが、食農生産科においても、真庭市の取り組む「循環型社会」をテーマに、発酵やバイオ液肥の普及についてもう一つのＭＢＭ認定に向けた授業構成ができないか引き続き検討している。

Ⅴ　地域貢献活動の充実

地域貢献活動については、地域の依頼を受け、生徒が考えたデザインで耕作放棄地に花の苗を移植し、景観保全に貢献したほか、植栽交流や収穫イベントも行った。地域の方々からも感謝され、生徒たちの自己肯定感も高まる結果となった。

地域のイベントについては、令和５年度、市内きたまちマルシェ等に参加し、地域交流を行った。販売活動や接客のよい実践の場となった。生徒たちは、お客様の反応から、販売形態をワークショップに変えるなど柔軟な対応をとったところ、好評裏のうちに終わり、単なる販売よりもコミュニケーション力が発揮され、進んで働く生徒の姿に大きな成長が感じられた。

また、（一社）真庭観光局の依頼を受け、ＴＶ番組の制作協力も行った。真庭の寺院を巡り、見どころを聞きながら御朱印を頂くという番組であるが、生徒は、静寂な境内・お香の香り・宗派で異なる本尊など、お寺の魅力と番組制作の生の現場を体験し、収録が終わるころには、地域に貢献できる番組をつくってみたいなど意欲を口にしていた。

今後は、依頼による受け身の活動だけではなく、生徒が地域と語り合う中で、課題を見つけ解決に努めるという展開ができるような方策も検討する必要がある。

（３）教育課程の構築

マイスター・ハイスクールビジョンに基づき、事業推進委員会等での協議を踏まえ、上記のような取組を整理、体系化し、３年間を通した真庭高校の学びとして第６で示すこととする。一例を挙げると、

食農生産科の特色ある学びとしては、発酵やバイオ液肥の学習、地域で展開する総合実習など、経営ビジネス科の特色ある学びとしては、バイオマスツアーガイドの養成を含めた観光ビジネスの学習、企業と連携した商品開発、ビジネスプランづくりに力を入れていく。

これが教育課程等の概要であるが、これらを教科・科目の学習に落とし込み、具体的な教育課程表を形成する。

詳細は第７で示すが、これらに加えて総合的な探究の時間（真庭高校ではＴＲ（真庭トライ＆リポート）と呼称する。）等を活用し、自らの生き方、働き方を考え、学ぶとともに、学科連携を通してより幅広く考察し、知識、経験を得ることで、育てたい人材像へ近づけていきたいと考えている。

事業期間中検討、構築してきた専門科の学びと、ＴＲや学科連携とを結び付ける取組は道半ばであり、有効な方策を引き続き検討していきたい。

５　地域を担う人材育成カリキュラム

（１）マイスター・ハイスクール事業推進委員会

事業推進委員会は別記１の委員により構成し、運営委員会が策定したマイスター・ハイスクールビジョンに基づき、事業実施に当たるとともに、教育課程の刷新の方向性について検討、決定に向けた協議を主に実施した。

事業推進委員会は、事業期間中に７度の会議を開催した（令和３年度に１回、令和４年度に３回、令和５年度に３回）。令和５年度の実施概要は別記２のとおりである。

（別記１）事業推進委員会名簿（当初委員の 50 音順）

氏　　名	所　　属　・　職
赤　田　憲　昭 安　藤　紀　子（R4.4.1～） 武　村　良　江（R5.4.1～）	真庭市教育委員会・教育次長
大　岩　　功	一般社団法人はにわの森・代表（真庭市郷育魅力化ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ）
大　越　健太郎	銘建工業株式会社・小断面工場長（産業実務家教員）
杉　山　俊　幸 宮　阪　淳　司（R5.4.1～）	岡山県立真庭高等学校久世校地・副校長
武　村　克　彦 吉　原　啓　之（R4.4.1～） 杉　山　俊　幸（R5.4.1～）	岡山県立真庭高等学校落合校地・副校長
道　満　洋　和	岡山県商工会青年部連合会・理事
豊　田　　涼	岡山県立真庭高等学校・校長
中　島　　洋	銘建工業株式会社・総務人事部長
平　田　　勉	マイスター・ハイスクール CEO
牧　　邦　憲 二　若　玉　基（R5.4.1～）	真庭市産業観光部・産業政策課長
三　村　公　一 丸　山　敬　三（R5.4.1～）	真庭支部中学校長会・会長
三　村　伸　行	NPO 法人真庭あぐりガーデンプロジェクト・ゼネラルマネージャー
室　　貴由輝	岡山県教育庁・高校教育課高校魅力化推進室長
吉　野　奈保子	NPO 法人共存の森ﾈｯﾄﾜｰｸ・事務局長（真庭市郷育魅力化ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ）

（別記２）事業推進委員会の実施概要

ア　第１回マイスター・ハイスクール事業推進委員会

（ア）日時：令和５年８月１日（火）10:00～12:00

（イ）会場：場所：真庭高校落合校地　３階会議室

（ウ）議事等

a　マイスター・ハイスクール事業進捗について

a）今年度の進捗状況等

b）課題への対応（案）等

b 持続可能な体制の構築について

（エ）議事概要(意見抜粋)

〇コミュニケーション能力は農業やビジネスの現場でも大切であり、今後のカリキュラムを考える中で考慮が必要。

〇経営ビジネス科は２年生の通年で商品開発、販売をやっていければ、真庭高校の魅力にもなるし、大切にしていきたいところ。高校が何をしたいかが分かれば、誰が何をどう補完するかが見えてくる。

〇考えが至っていないこととしてＴＲがある。ＴＲが１年からどうステップアップしていくか、そして２科の関係性にどう混ざり込んでいくのか見えない。

〇バイオマスツアーガイド養成講座については、教育課程として何を大事にすべきか、知識を得ることなのか、ガイドを輩出することなのか、その他のことなのかがまだ見えていない。とても良い取組ではあるが、最終的に生徒たちの力をどう育むのかを明確にしないと、カリキュラムと言い切れないのではないか。

〇課題を知るにせよコミュニケーション能力の育成にせよ対話の場面が多いに越したことはない。地域の情報を集めて先生を通して流してきたが、生徒が直接対面してやりとりする場は授業の中に組み込めていない。今のＴＲは学校がテーマを提示した中から生徒が選び６つのグループに分かれ事業を行っているが、企業側の「０→１で関わりたかった」という声には応えられていない。先生方は、まず教科書で学んで、その後に課題と思ったことを挙げるという方式である。ことの運び方が、地域の思いと先生方のやり方とマッチしていない。

〇教員の性として教えたがる面があるが、意図的に「ファシリテーター」あるいは「ジェネレーター」として、時に「議論に入って」「生み出す」力が大事。高校でいきなりコミュニケーション能力をつけるのは難しい。

〇農商のコラボこそＴＲがふさわしいのではないか。今でこそ社会では分業制が一般的だが、地方は違っていいと思う。学びを共有し合うことがコミュニケーションそのものにもなる。

イ　第２回マイスター・ハイスクール事業推進委員会

（ア）日時：令和５年 11 月 27 日（月）９:30～11:30

（イ）会場：真庭高校落合校地　３階会議室

（ウ）議事等

a　真庭高校への志願者確保の方策

b　学科改編から、３学年完成に向けた取組の実施状況

c　来年度の推進体制

（エ）議事概要（意見抜粋）

〇発酵とバイオ液肥の扱いが課題。食農生産科であれば食べ物、経営ビジネス科であればバイオマスというのが特色の柱になる。これを探究の時間でどう繋いでいくか。

〇１年生は課題を見つけ、生き方を考える。２年生でグループを組み替え、３年生で価値あるものの課題研究につなげるという考え方でどうかと思う。

〇真庭市で推進している郷育の先に、真庭高校の教育課程がダイレクトにつながればよいと思う。真庭高校でないと学べない、と思う生徒が増えるように。郷育を通じて、目的を持って真庭高校に進んで、そこでウェルビーイングをつかめる生徒になってほしい。

〇考え方や取組を、いかに中学生、保護者に発信していくのか。

→ＨＰ（まにこうブログ)、フェイスブック、YouTube で発信しているが、見に来てくれないと見てもらえない類いのもの。受け身なのが課題。

〇本事業を経て、生徒の変容が感じられているか。

→成長度は大きいと感じている。入学したての頃は何もしたくない、コミュニケーションを取りたくないと言っていた生徒たちが、行動力が身についたと生徒の口から出てきた。

〇真庭にはもっと企業がある。仕事を含め社会勉強をして、選択の幅を広げてほしい。

〇３年目にプログラムを作ることが一つのゴールだとは思うが、どう継続していくのか。

→資料に記載している内容は多いため取捨選択することはあると思うが、柱にしてやっていきたい。市の協力も得ながら、地域の声を聞いていきたい。

〇次の事項について、整理と役割分担をどうするかを考えてほしい。

・普通教科の教員を含め、学校全体で取り組むことができているか。

・地域への就職にどう結びつけるか。

〇令和６年度以降の推進体制について、ＣＥＯや産業実務家教員の県費対応は困難であり、市教委でコーディネーターの配置が可能かどうか協議している。教員数は、食農生産科と経営ビジネス科が完成年度で増員が想定される。また、来年度から学校運営協議会の設置の方向である。今度はマイスターだけでなく看護も考えていかなければならない。マイスター・ハイスクール事業の柱は引き継いでいきたい。

〇中学校の生徒・保護者もそうだが、教員に訴えることが大切だと思っている。中学校と高校の先生が交流できる場がないのが課題。

〇情報発信については、コドモン（市内小中学校・保護者の連絡アプリ）活用が有効。

〇校内での共通理解がもっとあるべき。

ウ　第３回マイスター・ハイスクール事業推進委員会

（ア）日時：令和６年２月 14 日（水）17:30～20:30

（イ）会場：銘建工業株式会社本社　２階会議室

（ウ）議事等

a　３年間のまとめ

b　第２回運営委員会（1/16）で提示された課題への対応

a）マイスター・ハイスクールに、全校を挙げて取り組むことの表明

ⅰ）真庭高校の学校運営基本方針にマイスター・ハイスクールの考え方が取り入れられること。

・「真庭流マイスター・ハイスクール」としての分かりやすいメッセージ

・学校運営協議会による学校運営基本方針の承認、学校教育活動への意見申し出、進捗確認の担保等

ⅱ）学校運営基本方針を着実に実行するための校内推進体制

・全学科・全教科を挙げた体制整備とその浸透を図ること。

ⅲ）真庭型産業人材育成プログラムの学校正式方針化

・ＴＲと学科連携の行方について

b）農業実習地の対応（ハッピーファームとの契約等）

c　学科の先生方から地域の方へ

d　市による令和６年度支援予定内容

e　その他

・コミュニティ・アプリの進捗状況

・今年度会議等、行事予定等

（エ）議事概要（意見抜粋）

〇真庭高校の学校運営方針として、マイスターの考え（地域をフィールドとした学習展開）を継続する。３月中に練り、学校運営の基本方針として年度当初職員に伝達し、推進する。また、真庭市や地域との連携については、現在行われている「合同会議」を継続する。

〇真庭高校の方針を表すメッセージ的なものを考えるべきとの意見については、教員や生徒の意識を上げていく意味でも、現場からの提案を吸い上げてきたい。

〇学校運営協議会の委員構成（案）については、学校教育寄りと感じたが、農業・商業を起点にしていく中では、そちら寄りも含めた多角的視点が必要ではないか。

〇学校の魅力を打ち出していくターゲットは「保護者」でよいと思う。様々なステークホルダーがいるのは確かだが、幅広に考えたらありきたりなものになってしまうため。

〇地域連携学習推進チーム（案）について、全員集まることは困難とのことだが、そこが一番大切ではないか。

→実情としては、校内で同時にこれだけの人が集まることは難しい。全体共有は何らかの方法で図るとして、スピード感を出そうとすると部会制が現実的と思っている。

〇ＴＲの動きの遅れが不安視されているが、ＴＲの進め方については、進路指導課で原案を作り、学科・学年から意見を募るなど全教員が関わって行っている。１年間取り組んできた教員からの声や発想を取りまとめていかなければならない。

〇マイスター・ハイスクール事業が学校全体の動き、各課、教科、先生方に到達していないことが大きな課題として認識される。

〇「地域のため」の言葉をぼやかして使うとメッセージ性が消える。「地域」の解像度をあげ、「誰のために」が見えるようになると、生徒が考える先の打ち手になっていくと思う。本事業によって見えてきたと思うのでより解像度を上げてほしい。

〇これまでと同じことをしていたら人は来ない。県南は周辺環境を含め人を呼べる状況にあるが、県北はそうはいかない。そういう中で人を呼ぶことができる街にあって、それをいかに教育と結びつけるか、それが真庭高校の今後のヒントだと思う。

〇真庭高校はどういう学校かと問われて先生方はうまく言えないようだが、ここで出た視点や報告の中にその要素がたくさん詰まっている。後はこれをどう表現して、伝えるのか。

〇高校という世界では時間もかかるし「やってみよう」だけでは進まないことも感じた。この会は終わるが、一方で「終わらせない」ことも大切。今後も関係者が距離をより近くして取り組んでいく必要があり、そういう意味では本事業でつながりが深まった。

〇学校運営協議会の動きに合わせ、地域学校協働活動の動きも取り入れながら考えてもらいたい。教員だけが教える学校ではないという意見は、看護科もまさに同じ。

（２）教育課程編成への提案・助言等

・教育課程編成への提案・助言

地域との連携、交流については、落合校地では普通科のＴＲであったり、久世校地では農業系学科の取組であったり、それぞれが年月を重ね積み上げてきた実績があったが、課外活動に位置づけられるもの、課程内の学習として行われていたもの、単発のイベントものなど様々であり、特に学科改編後の３年間を通した学びの中での体系化や、地域での印象度の面で弱みがあった。

また、経営ビジネス科は新設学科であり、まさにゼロからのスタートであった。そのような中で、事業推進委員でもあるＣＥＯや郷育魅力化コーディネーターの助力を得て、管理機関や担当教員で構成した合同会議や担当者会議で作業を行った。まずはそれぞれ単発の事業等が教育課程のどこに位置付けられるかの整理を行ったのち、その意義・位置付けを再確認しながら、教育課程への落とし込みと体系化を行いつつ、３年間の学びの姿を形作り、学科の特色を見出す作業を行い、後記「６　地域産業学習カリキュラム」で示すとおり３年間の学びの体系表を作成した。

両科とも、まず教育課程内で実施すること、課外活動で実施することを位置づけ、課程内で行うことについては、①学科の学習に必要なベースとなる知識、技術や、②探究的な学びを踏まえ、③特色ある学びを位置づけた。

食農生産科の特色ある学びとしては、発酵やバイオ液肥の学習、地域で展開する総合実習など、経営ビジネス科の特色ある学びとしては、バイオマスツアーガイドの養成を含めた観光ビジネスの学習、企業と連携した商品開発、ビジネスプランづくりに力を入れることとしている。

学校行事・課外活動は、授業時間数や参画人数の関係で課外の位置づけであるが、発展的な取組として特色を見出すことができると考えている。

両科とも「知る、実践する、探究する」のサイクルで３年間の学びが構築されるが、食農生産科ではそのサイクルを学年毎に回しつつ上位学年につなげていく「スパイラル型」、経営ビジネス科ではそのサイクルを学年順に進めていく「右肩上がり型」というイメージで構築している。

両学科は令和６年度に完成年度を迎える。まずはこのように形作られてきた学科の学びをしっかり実践していきたい。一方で、学科の学びとＴＲや学科連携とを結びつけることは、真庭高校ならではの教育の特色をより打ち出せる有効な取組と考えられるものの道半ばであり、有効な方策を引き続き検討していきたい。

（３）真庭高校での学びを小中学生に伝える交流学習の在り方

・小学校やこども園との植栽交流

地域の依頼を受け、生徒が考えたデザインで耕作放棄地に花の苗を移植し、景観保全に貢献した。また、植栽交流や収穫イベントも行った。地域の方々からも感謝され、生徒たちの自己肯定感も高まった取組となった。

・真庭組子の取組の伝承

課題研究の授業がきっかけで、飛鳥時代から続く日本の伝統技術である「組子」に興味を持った令和５年度食農生産科・経営ビジネス科の生徒５名が、市内企業が請け負った、令和６年に地元岡山で開催される全国植樹祭の式典会場に整備する御座所の背面組子壁の制作に協働した。

組子を学んだことで地域への誇りと自信をもった生徒は、県北 11 団体が参加するフォーラムなどで、地域活性化につながる取組としてこの実践を発表した。

その後、５人は組子のすばらしさと技をクラスに伝え、クラス全員で、地元の小学校２校に出前授業を行った。自らの学びのみならず、それを大きく広げる展開ができた。

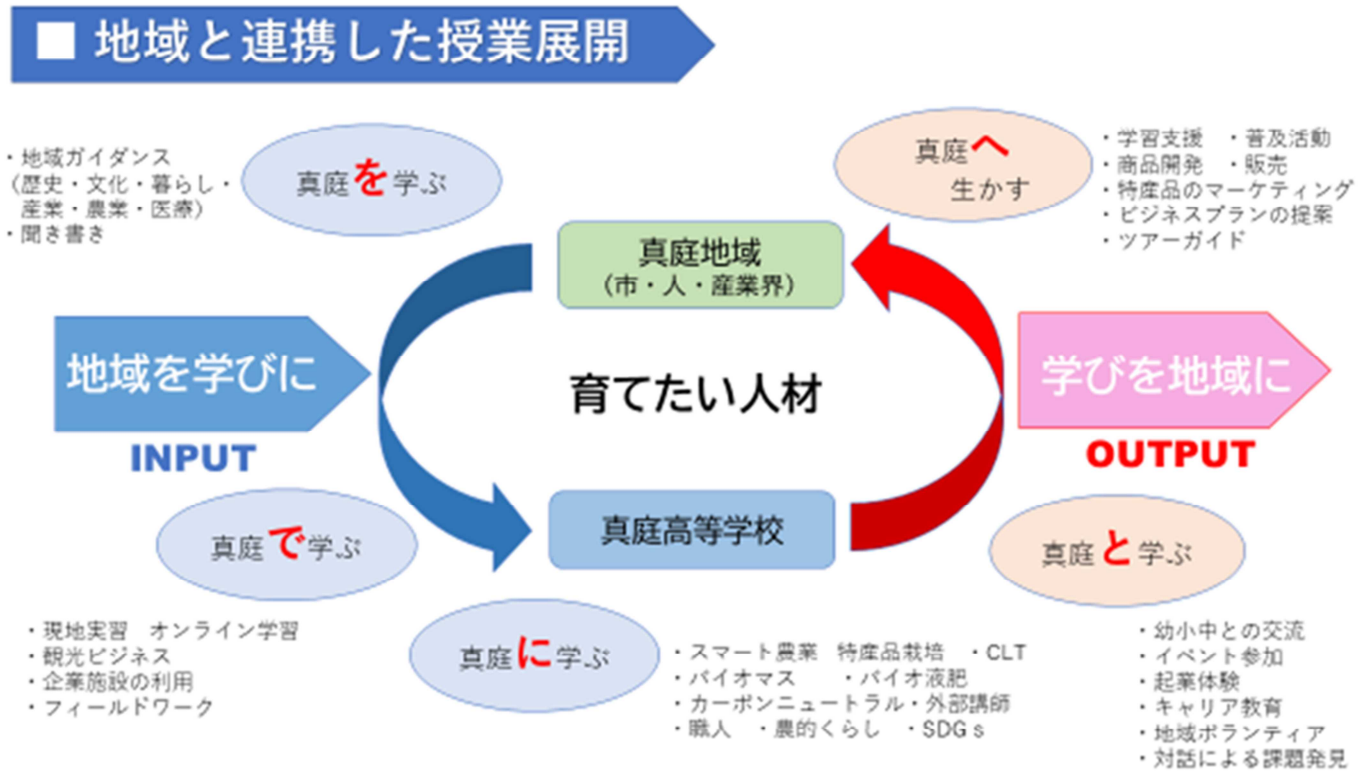
・交流学習の在り方

今後は、依頼による受け身の活動だけではなく、生徒が地域と語り合う中で、課題を見つけ解決に努めるという展開ができるような方策も検討する必要がある。また、小学校との植栽交流や出前授業などで小学校やこども園と連携した取組は実施することができたが、中学校との関わり方については、引き続き検討・改善の余地があると考えている。

（４）真庭高校と地域企業等との連携・地域をフィールドとした学習展開の在り方

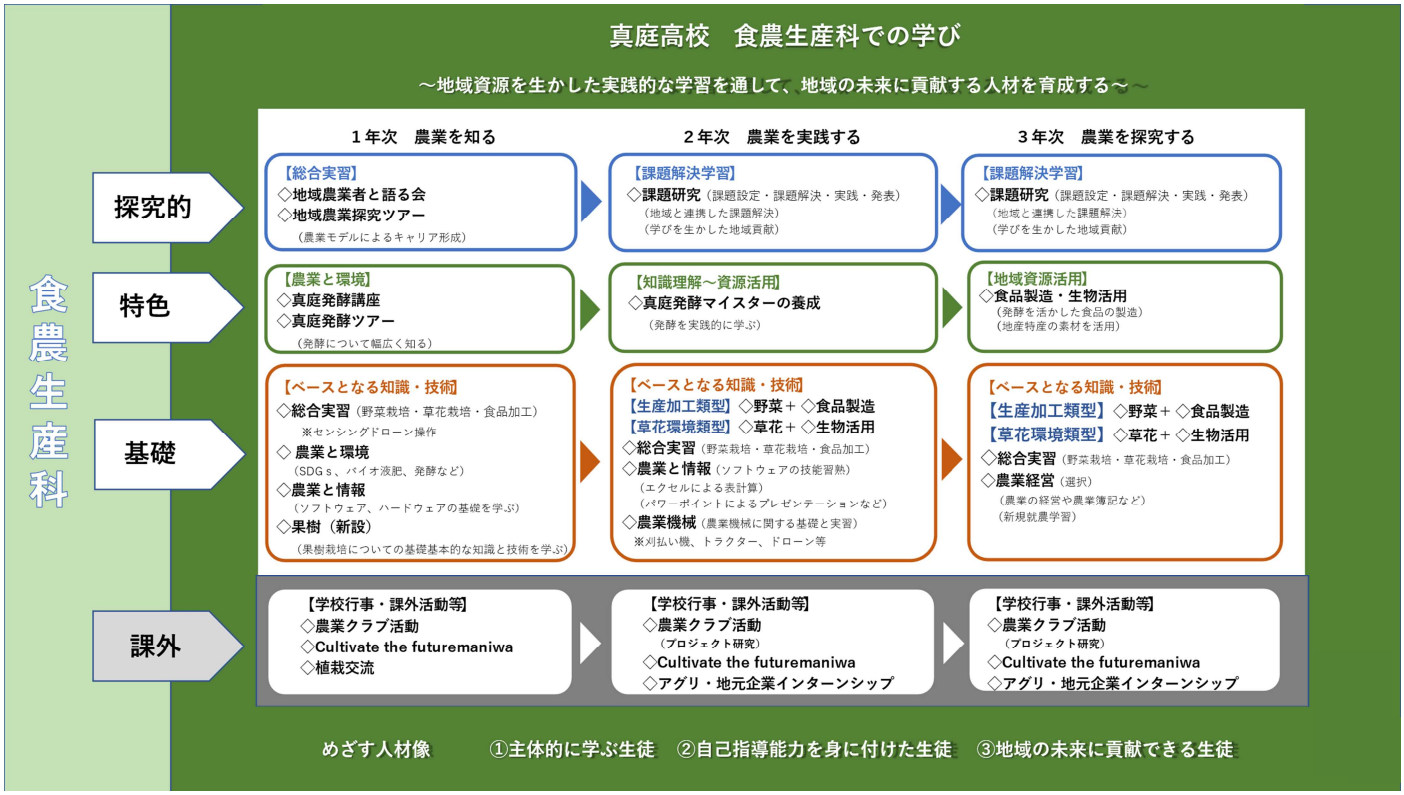
・地域をフィールドとした学習展開の在り方

真庭型マイスター・ハイスクール事業の中心は地域と連携したカリキュラムの創造といっても過言ではなく、地域の力を生かしながら次世代を育成することが求められていると理解してきた。そういったことから、地域と連携した授業では、「真庭を学ぶ」「真庭で学ぶ」「真庭に学ぶ」など地域を学びに取り入れるインプットの学習と、「地域と共に学ぶ」「学んだことを地域へ生かす」など、アウトプットの学習を組み合わせることで、育てたい人材の育成に向けて効果的に取り組むことができると考えた。



６　地域産業学習カリキュラム

【食農生産科のカリキュラム整理表】



○産業実務家教員による木材・バイオマスに関係した課題研究

産業実務家教員が、木造でも高層建築を可能にするＣＬＴについて授業を行った。課題研究ではＣＬＴでベンチを制作し、バス停に設置した。多くの方にご利用いただき、やりがいを感じることができた。素材を体感し、制作するという体験を重視したインプット型の学習と、ベンチを制作し地域に設置するというアウトプット型の学習を組み合わせることで、求める人材育成に迫ろうとした。

〇探究活動からの展開

課題研究で飛鳥時代から続く伝統工芸の「組子」の研究に取り組んだことがきっかけで、地元企業の佐田建美社長から全国植樹祭で天皇皇后両陛下がお座りになる御座所の組子壁の共同制作のお声掛けがあり、生徒５人が立候補した。佐田建美は、ホテルオークラ東京（The Okura Tokyo）のメインロビーの装飾も手掛けた企業である。生徒は、髪の毛１、２本分の厚さにこだわる職人の感覚を、実際に体感することで、初めて伝統のすばらしさを実感した。薄い板を接着剤も使わずに組み上げるときの緊張感と完成したときの興奮を味わうことができた。

５月には全国植樹祭のステージに設置され、その後は岡山桃太郎空港の発着ロビーに展示される予定である。組子を学んだことで、地域への誇りと自信をもった生徒は、県北 11 団体が参加するフォーラムで、地域活性化につながる取組として、この実践を発表した。その後、５人は組子のすばらしさと技をクラスに伝え、クラス全員で、地元の小学校２校に出前講座に出かけ、学びを大きく広げた。

○先進農家訪問

１年生が自動草刈り機やＧＰＳ搭載のトラクターなどが活躍する先進農家を訪問した。生徒は、作業の効率化だけでなく、農業が地域の景色をつくっていることも知ることができた。ドローン演習にも意欲をもって取り組み、岡山県立農業大学校の講義ではスマート農業のメリットだけでなく、デメリットについても学ぶことが出来た。

○発酵学習

真庭市は、酒、酢、味噌、醤油、発酵、チーズ等、伝統的な発酵文化とバイオ液肥やバイオ燃料などの先進の発酵まで盛んな地域である。真庭高校でも発酵学習やバイオ液肥の探究が始まった。今後、真庭の発酵を語れる生徒にしたいと「真庭発酵マイスター」の認定を考えている。